

## 介護過程教育についての一考察

——学生の悩みを探る——

A Study on how to Teach the Students Studying the  
“Care Process” at Training Schools for Care Workers:  
Survey Questionnaire for the Students who Study Care Process

菅 野 みどり

Midori KANNO

### 要 旨

介護教育の中にある介護過程とは、学内で習得した知識と技術のもと、実際に介護の現場に於いて利用者を受け持ち、実践を通して情報を収集しながらその情報を分析・解釈することで、利用者のニーズの確認や介護上の問題把握、また満たされないニーズを明らかにしながら、問題解決へとつなげていく。しかし、実情としては、さまざまな困難があり、思うように進まないといった状態である。今回、そのような背景から学生が抱える問題点とは何かを明らかにすることとした。

### キーワード

ニーズ、情報収集、問題把握、介護過程

### はじめに

近年、社会のニーズに伴い、介護の専門性や質が求められていることは、言うまでもなく、特に介護福祉士の専門分野においては期待も大きい。

その中でも特に利用者への質の高い生活援助サービスについては、軽視できない部分である。介護福祉士養成校においてもさまざまな教育カリキュラムの中で、これらに応えられる人材育成に力を注いでいる。その一つに介護の現場実習があり、その中で知識や技術または、実践能力を身に付け、さらに問題解決能力へと拡大し、それらを統合した中での教育を行うことを位置付けられているが、この介護実習をいかに有効に進めていくかが大きな課題となるところである。本学の4年生（介護クラス）では、最終実習段階において学生各人が一人の利用者を受け持ち、介護福祉計画を作成して、それに基づいた介護の実践を展開している。実習前には、実習指導の授業において、それなりの学生

の理解は示されたものと認識していたものが、実際には、介護計画作成段階において「介護計画が十分に作成できない」という意見が聞かれていた。個別介護の必要性を理解し、介護過程の学習を有効にするためにもこの学生等における困難要因を明らかにする必要性があると思われる。

### I. 「本学福祉クラスにおける介護過程実習の概要」

近年、高齢社会が進む中、日本では終戦後から50年にかけて、経済社会の発展に伴い、国民生活を安定させ、福祉社会から福祉国家を築きあげた。一方、家族形態の変化、少子・高齢社会が急速に進展してきた。そのため、寝たきり老人や要介護老人が急増し、それに対応する介護の専門職のマンパワーも求められてきている。福祉専門職のマンパワーを養成するために大学教育の一貫として介護福祉士の人材育成も行っている。

平成12年度には、カリキュラムの改正が行われた中の1つに介護技術演習の内容に介護過程の展開が強化され、本学の介護クラスにおいても講義と演習については、段階的に入れながら行っている。4年次においては、最終実習段階として介護過程の学習を行い、

実践現場においては、それらを統合させた中での利用者のニーズの発見やまたはそれらを引き出し、生き方に沿った介護を展開できるようにすることが必要となる。

教育側のねらいとしては、利用者の情報をどのように分析・解釈するかという思考過程を強化し、生活者としての個人を理解しながら計画・実施を進めて欲しいと考えるが、これらを実践していく過程においては、さまざまな困難点があった。

そこで学生の困難点について調査し、問題を明らかにした上で、介護過程での効果的な現場実習を考える一助としたい。

本学における介護過程実習計画については「表1」のとおりである。

## II. 調査方法

1) 調査対象者 N大学介護クラス4年生 (17名)

2) 調査方法 アンケート調査方式

\*なおアンケートの内容が分からない学生については面接をし、インタビュー形式で説明を行った。

3) 調査期間 平成15年9月22日～9月30日

4) 調査項目

1. 〈受け持ち利用者についての項目〉

質問内容：受け持ち利用者が自分に合っていたと思うか

①適切であった②ケースが難しかった③不適切であったの3件法

2. 〈介護過程の実践について〉

質問内容：介護過程の取組みがスムーズに行えたか

①スムーズにできたから③の全くできなかったまでの3件法

3. 〈受講の時期について〉

質問内容：介護過程の授業を受けた時期は適切だったか

①適切であったから③時期が遅かった等までの4件法

4. 〈授業及び改善点について〉

質問内容：具体的な指導を求める点はどこか

自由形式で回答を求めた

## III. 結 果

今回の結果については、対象人数が少数であることから詳細な実数の集計は避け、質問項目に対する回答の傾向を分析した。

1. 〈今回受け持った利用者について適切であったかと思うかについて〉

ほとんどの学生については、適切であったとの回答があり、その中でも利用者との相性が良かった（利用者の人柄が良い）などと述べられていた。しかし中には、利用者を自分で選択しておらず、現場の指導者に委ねたとの答えもある。また、利用者の選択については、さほど問題にはならないとの少数の声もあがっていた。

2. 〈介護過程の取組みについて〉はスムーズにできたかの質問に8割以上の学生が、なかなかできなかったと答えている。その理由について最も多い回答順から挙げた。

① アセスメント（情報収集の仕方）のとりかたが難しく時間がかかった

② 利用者とのコミュニケーションを図り、利用者の真のニーズを把握すること

③ 利用者のニーズを把握し客観的に分析すること

④ ケースレポートの作成の仕方

⑤ 施設内での仕事の役割遂行と他利用者への援助の両立

H15. 4. 28 作成

表1 介護過程実習計画

5月7日からの実習は今までの実習とは形態が異なっています。まず実習日が週に5日ではなく、月・水・金の週3日になっています。ですから効率の良い実習にするには各自目的・目標をしっかりとって取り組んでください。今回の実習の大きな課題は、介護過程を実践するとともに、現場実習の集大成をしなくてはなりません。もちろん従来の実習内容（技術の習得・応用、施設の理解、他職種との連携、利用者のニーズの把握等）プラス介護過程の実践ということになります。「介護過程にかかりつきり」になることだけは避けてください。

【介護過程実習計画】従来の実習内容+（プラス）という考え方に基づく

	日程・事項	介護過程進行状況	備考
第一週	① 情報収集 ② アセスメント ③ ニーズの把握 ↓ 早ければ ④ 計画立案	<ul style="list-style-type: none"> <li>・利用者との面接（自己紹介）受け持ちをさせていただき旨を話し、了承を得る。</li> <li>・施設内の把握（物品の位置、他の利用者の大まかな把握、週間スケジュール等）</li> <li>・施設の動きにあわせて、空いた時間があれば情報収集する。情報収集の基本は利用者から直接聞くことであるが、カルテやスタッフからの情報も参考にする。（注意：カルテを頼らずアセスメント表にそって自分で情報を整理する。）</li> </ul>	実習個人票 評価表を担当者に提出する。
第二週	① アセスメント ② ニーズの把握 ③ 計画立案 ④ 介護過程記録 ⑤ 介護過程記録（施設提出用） ＊第1週～第2週いっばいで介護過程の実施計画を立案すること。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A3サイズの「介護過程記録」に実施計画まで記入する。⇒教員が1度確認し、良ければ実習担当者へ相談する。この時点で学生は担当者と話し合い、実施できる項目と実施できない項目を選定する。</li> <li>・実施可能な項目を確認したうえで、「介護過程記録（施設用）」に記載し、施設に提出する。（実施計画の欄に記入……評価の欄は空白のままでよい）</li> </ul>	火・木に登校した時には、できるだけ担当教員に介護過程進行状況をチェックしてもらうこと。
第三週～第七週	① 計画実施 ② 評価 ↓ ③ 再アセスメント ④ 計画修正⇒実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この週から本格的な介護過程の実践となる。</li> <li>・①～④の繰り返し（短期目標の達成）</li> <li>・目標達成⇒計画の継続または新規目標設定</li> <li>・目標未達成⇒計画修正</li> </ul>	「介護過程実習記録（A4サイズ）」には、受け持ち利用者の情報を漏れなく記入すること。記入の仕方は各自に任せるが、この情報がケース検討会の資料作りのときに重要になってくるので、毎回きちんと記録すること。
第八週	① 介護過程の評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・約4週間のまとめを行う。</li> <li>・「介護過程記録（施設提出用）」を担当者から一度返してもらい、評価の欄に記入する。⇒教員が確認してから施設へ再提出する。</li> </ul>	実習日誌の提出について担当者を確認をとる。
実習終了後	① お礼状送付 ② 介護過程のまとめ ③ ケース検討会準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習施設にお礼状を出す。</li> <li>・6月下旬にはケース検討会の概要を決定するので、決まったら各自準備にとりかかる。基本的に全員が発表する予定。</li> </ul>	ケース検討会⇒実習指導の授業で確認を取っていく。
その他	<b>【教員の動き】</b> 介護過程立案までは、基本的に週に2日は巡回する予定です。しかし1～3年の授業もありますので変更がある場合があります。計画実施を中心とした週は週に1日の巡回予定です。		

#### ⑥ 介護過程への理解不足

3. 〈学習の時期において〉はどちらとも言えないとの回答が最も多く、その次には、介護過程の授業を受けてから実習までの期間が空いていたことで（約2ヶ月）時期が早かったという回答があがっていた。

4. どのようなことに時間をかけて指導を受けたかについては、主に4つにまとまった。

① 介護過程を考える視点やポイントについて

② 数多くの事例を用い介護計画立案、演習を行いたかった

③ 基本的な介護計画の立て方についてもう少し説明して欲しかった

④ 介護過程の全体の流れについて

#### IV. 考 察

##### 1. 〈受け持ち利用者について〉

受け持ち利用者が自分にとって適切であったかについて学生の自己評価では、利用者とのコミュニケーションについてはスムーズに行なわれ、また利用者についての理解度も示している。回答の中には、利用者に励まされることもあり、また協力的であったとのことから相互関係がうまくいっていたと思われる。「利用者の喜ぶことをしたい」と思って頑張れたなどの声もあがっていることから、利用者に対する思いや利用者理解への意識が高いのではないかと考えられた。

また少数意見の中に介護のプロとして見た場合、ケース〈利用者〉を選ぶということではなく、如何なる場合に於いても対応をしていかなければならないなどあり、専門職意識も十分に備わっていると感じられ、担当利用者については問題にしていなかったと思われる。

\*受け持ち利用者を選ぶ際には、一般的に学

生自らが選択する場合とあらかじめ施設側にピックアップしてもらった利用者を学生が選択するという方法がある。

今回本学の実習では後者の方法をとった。これについて学生自身からの問題提起や実習への取組みなど特に問題はなかったが、施設側（1施設）からは両者選択の幅を持たせてはどうかという意見もあった。よってこの両者については、今後の検討・課題へと繋げていく方向である。

##### 2. 〈介護過程の実践について〉

ほとんどの学生が最初の取組みに困難を示しており、ほとんどが①アセスメントの取り方の困難性を挙げていた。

介護過程におけるアセスメントとは、利用者の健康状態の理解や生活障害、現状維持のための情報収集に基づいて分析・解釈を行い、利用者のニーズの確認や現在の問題の把握、将来の問題把握をし、また、満たされないニーズや問題の所在を把握していくことで、介護上の問題を明らかにしていくことである。ここでアセスメントが難しかったということから何故難しかったのか次の2点が考えられる。

①「アセスメントの採り方が分からない」

②「アセスメントの本来の意味が分からない」

①アセスメントの採り方が分からなかった場合を考えると、介護過程自体の方法論的なことや実際スキルの段階で戸惑っていたからではないと言える。もし、そうであれば授業の中で、より具体的な介護過程の指導等が教員に要求される。例えばアセスメントにおける情報のどの部分をカルテ及び資料から抽出すべきか、または利用者が痴呆症である場合、事実の裏づけを誰に求めるかなどスキルの具体的な指導が必要となる。

②アセスメントの本来の意味をもし理解して

いないのであれば、利用者（状態像）に関わるアセスメントに結びつかず、その人にとって何が問題であるかなど状態像を理解した上での問題点が抽出できないと思われる。

ほとんどの学生が収集したデータに基づき、利用者の中心的問題を取り上げるということに視点を置いていたが、このように利用者の問題点ばかりをとり上げることだけに集中した場合、全体的な利用者の理解が不十分となる。

介護過程を展開する上で、中心的問題をどこに置くか、それは、利用者の残存能力も含めた上で判断し、課題をどこに置くかが重要となってくる。黒田<sup>1)</sup>は全体像を捉えることの重要性を強調し、全体が捉えられないと、情報はたくさん得られているのに情報の意味内容が分からなかったり、アセスメントの視点がいきなりどのような介護が必要なのかになってしまい利用者の健康状態が見えないことを指摘している。

今回、学生のアンケートではどちらかという利用者の介護上の問題が、表面的な問題として分割されており、黒田の指摘のような全体としての統合（利用者理解）には至っていなかった。本来、利用者の身体要因や生活要因も含めた上での情報の統合、問題への明確化へと展開させることが必要であるので、今後はこれらのことも含めて、授業にどう活かすかまたは、具体的な指導に結び付けるかが課題となる。

### 3. 〈受講時期についての項目について〉

当初は、学習時期も視野に入れていたが、実践実習を行うまでのあいだに学習した内容を忘れてしまっていた。若しくは、直前であれば覚えていたなども考えられたが、時期においては、どちらとも言えないという回答が最も多く、この時期に関しては、さほど意識が高いものとは思われなかった。

### 4. 〈授業および改善点について〉

重点的な指導を受けたかったことの中に、最も挙げられていた項目について ①介護過程を

考えるポイント ②数多くの事例のもとに検討することなどが特に挙げられていた。②の数多くの事例の検討については、介護ニーズの低い人から高い人、または、障害や痴呆などさまざまな症例の中で、どれだけの事例学習が必要であるかは、はっきりしていないが、アセスメント段階における思考過程の強化訓練、解決目標に対する実践能力の育成のためにも事例学習は不可欠であると思われた。これらを多く踏まえることで、学生の実習現場におけるアセスメント作業がスムーズに行なわれ、③の基本的な介護計画の立て方や④の介護過程の全体の流れについても理解できるのではないかと思われた。

### おわりに

学生のアンケート調査結果により、今後の教育課題として主に次があげられる。

- ① 介護過程に必要なアセスメントの視点
- ② 介護上のニーズの視点
- ③ 事例に基づく介護計画作成のトレーニング

アセスメントについては、基本的な人間理解も含め、A. H マズローの基本的欲求段階層説も理解する必要がある、さまざまな問題点についてつねに「なぜ、そうなのか」「それがその人の生活にどのように影響しているか」利用者の生活全体をみたときに何が必要となり、何がその人にとって問題になるかの視点を養い、具体的な指導が必要であると思われる。

介護上のニーズ「介護上の問題」の捉え方にはまだ定説はないが、介護の究極の目的は、利用者の生活の質を高め自己実現を助けることである<sup>2)</sup>。この目的を少しでも高められるように日々の問題の原因を究明し、状況を少しでも改善する努力をすることから、より高次の欲求である利用者の自己実現の欲求を引き出し、利用者とともにその実現を目指していくことが介護者の役割の一つとも言える。つまりここにおけるニーズとは、「利用者が望んでいる状態になっていない」言い換えれば、「ニーズが満たさ

れていない状態」があれば「介護上の問題がある」と判断する。ただ単に病気や障害など改善・解決できない要因に介護上の問題や原因を見つけるのではなく、希望（ニーズ）の実現を阻む生活要因や、本人や取り巻く人々の意識といった改善可能な要因も含めて問題となる原因を見つけ改善のための介護計画作成へと繋がるような指導に結び付けたい。

本学の介護技術の演習・実習指導を担当する一人として、つねに学生のニーズに沿った指導展開が行われるようにしていきたいと考える。そういった意味においても今回、介護過程については、本学のみに調査の視点をおいたが、今後は、他学の学生も含めて比較・検討を行いながら介護専門職の資質の向上または育成に関わって行きたい。

#### 引用文献

- 1)「黒田裕子：Source：教員のための看護診断入

門 看護における看護診断に位置づけ看護過程と看護診断，看護教育1994」

- 2)「石野育子：最新介護福祉全書別巻2介護過程，メジカルフレンド社2000」

#### 参考文献

- 1) 井口ひとみ，布施千草 介護過程演習の一考察—学生の自己評価の分析から—
- 2) 石野育子 介護過程の教育方法に関する研究
- 3) 山形県立保健医療大学看護学科 佐藤幸子・青木実枝・井上京子・新野美紀・鎌田美千子・小林美名子・矢本美子「基礎看護領域における看護過程の教育方法」
- 4)「戦後社会保障の形成—社会福祉基礎構造の成立をめぐる—」・中央法規
- 5)「社会福祉の現代的課題—地域・高齢化・福祉—」・サイエンス社
- 6)「介護実習指導方法」社会福祉法人 全国社会福祉協議会
- 7)「社会福祉士養成講座14 介護概論」・中央法規
- 8)「介護福祉士養成講座11 介護概論」・中央法規